OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大正末期から昭和初期の雑誌における芥川龍之介受容の諸相と新時代の文学の形成 ―『文芸時代』、『文芸戦線』、『辻馬車』を中心として―
Author(s)	李, 慧珏
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72428
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　李　慧珏　）	
論文題名	大正末期から昭和初期の雑誌における芥川龍之介受容の諸相と新時代の文学の形成 ―『文芸時代』、『文芸戦線』、『辻馬車』を中心として―

論文内容の要旨

本論は、大正一三年から昭和二年前後までの文芸雑誌における芥川龍之介に関する評論の調査及び分析を通して、芥川の同時代における位置づけを明らかにし、文学史の一側面に光を当てる研究である。

芥川は大正文壇を代表する作家の一人であり、文学史の中で頻繁に取り上げられる作家でもあったが、芥川の自死と昭和改元という社会的変動が重なっていることで、その死は大正文学の終焉として見られてきた。しかし、その自死から数年前にまで遡らなければ、大正末期における芥川受容の全体像を捉えたとは言えないだろう。近年の研究では、芥川と新時代の文学形成との関係について、断絶性ではなく連続性が指摘されてもいるが、そうした研究についても十分な論拠が挙げられているとは言い難い。このように、晩年の芥川の受容問題と、文学史が定義する大正文学の終焉とは、象徴的に重ね合わされてきた。本論はこうした研究状況を踏まえて、大正末期から昭和初期にかけての芥川受容の構図を明らかにすることによって、芥川の文学と新時代との連続性を論証するものである。

本論は、全四章によって構成される。先ず、第一章から第三章までは『文芸時代』、『文芸戦線』と『辻馬車』三誌による芥川評を取り上げ、新時代の文学者による芥川受容を検討する。この三章とは対照的に、第四章では芥川の文学観について考察を加え、『新潮』における芥川と同世代に属する作家たちの芥川評を取り上げる。これによって、同じように芥川の周辺にいるにしても、異なる立場にあった文学者による芥川理解を細かく考察することが可能となり、結果として多方面から芥川という存在に光を当てることができるのである。

第一章の『文芸時代』における芥川評の特徴は、同人を芥川と比較して論じることが多い点にある。これは初期において特に顕著な傾向であった。その理由として考えられるのは、創刊当時の新感覚派が、その基盤となる理論が定まらない中で、「新感覚」とは何かを巡って既成文壇との論争に苦しんでいた、という事情である。この論争は既成文壇による疑義の提示、すなわち横光利一の一文「特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された」（「頭ならびに腹」）に関する、このような表現が作品の全体に如何に作用するか、という問いかけから始まった。これは即ち、表現と構成における知性の問題を問うていると言える。この時期の芥川評を分析すると、まさに芥川の知的な素質が川端康成や横光利一などの新感覚派の同人によって論じられていたのである。『文芸時代』は新感覚派の同人雑誌でありながら、自分たちの芸術をアピールする際に、既成作家である芥川という存在を必要とした。もう一つの特徴は、芥川と一緒に言及された作家の中では、佐藤春夫が最もその回数が多かったという点である。それらの評論において、特に注目されたのは芥川および佐藤の、知性と詩美の面であった。このような性質は両者が『文芸時代』で取り上げられた主たる要因であったと思われる。

第二章で扱う『文芸戦線』における芥川評は、創刊当初と芥川の没後に集中している。その評価の多くは芥川の作品ではなく、彼のプロレタリア文学に関する発言への反論であった。誌面における芥川評の性質上の転換点は、プロレタリア文芸運動の指導者的位置にあった青野季吉の「自然成長と目的意識」（大正一五年九月）の発表であった。この文芸運動の理論が築かれる以前、誌面における芥川批判は往々にして彼が属するプチブルジョア階級に対する反感を表明したものが多かった。しかし青野は、無産階級にとっては、単に感情を訴えることだけではなく、その感情を規定する目的意識もまた重要であると主張した。青野の目的意識論が発表された後、芥川はプロレタリア文学を論じる際に、偶然にも青野の論とは裏腹に、芥川が当時熱意を注いでいた「詩的精神」の提起に向かい、詩的な感情こそが肝要であると主張した。これを承けて青野は自身の理論に基づいて、芥川の感情のみを強調し、運動そのものの目的意識に言及しない態度を大いに批判した。このように、『文芸戦線』を見ることで確認できたのは、芥川の文学観が、無産階級文学陣営において反響を起こしてゆく、その経緯の実態である。芥川自身の詩的感情に対する志向と無産階級運動における感情への制約という二つの方向性が交錯する中で、芥川と無産階級運動の指導的理論との接点が作り出されたのである。

『文芸戦線』における芥川受容の全体を見るとき、同誌の姿勢が『文芸時代』のそれと極めて類似していることに気付かされる。プロレタリア作家達による「芥川否定」の原動力は、自己の価値を強調し、運動理論の正当性を主張

する身振りの内にあった。そして『文芸時代』も論争に臨む際に、同じ姿勢を示していたのである。つまり、従来対照的な存在として認識されてきた二つの雑誌の共通点が、芥川を補助線とすることで浮き彫りになったと言える。以上のような考察によって、芥川が次世代の文学潮流の中で消化・再生産されていく、その具体的な様相が明らかとなった。それと同時に、大正と昭和を分断された二つの時代として捉える従来の認識に対して、これとは異なる視座を提示することも可能になった。

第三章では、『文芸時代』、『文芸戦線』以後の世代にまで考察の範囲を広げ、そうした次世代の芥川に対する理解を検討した。『辻馬車』においても、芥川に対する言及は創刊当初と芥川没後に集中していた。創刊の前後、『辻馬車』の同人たちは新感覚派を尊敬すると同時に、芥川に対しても憧れを抱いていた。特に同人の藤沢桓夫は芥川に崇拝に近い感情を抱き、理智と感覚の拮抗をモチーフとした作品を発表した。興味深いのは、藤沢の目に映った芥川と新感覚派は、完全に断絶した新旧の世代ではなく、ごく当然として繋がりと類似点を持つ作家たちであったという点である。大正と昭和の時代を生きた文学青年の証言から、従来言われてきた時代の遷り変わりというものは、実際はより緩やかなものであったことが判然とするのである。つまりここで、『辻馬車』同人達の目を通して、芥川と新感覚派の連続性を確認することができたのである。一方、雑誌の後期になると、彼らは芥川の芸術的な業績に対しては、相変わらず尊敬していたが、思想面において、芥川を超越できるという確信を持っていた。彼らは芥川の晩年の文学観の変化よりも、時代の変化、つまりプロレタリア文学の急激な成長に追い付こうとして物凄い速度で雑誌自体の方向性を転換させ、その時代の潮流の先を越えようとしたのである。

総合的に考えると、『辻馬車』の同人たちは創刊から休刊までのわずか三年間で、関心が赴くままに、その志向を新感覚派からプロレタリア文学へと切り替えることができた。その中で、芥川に対する評価軸も同じように移り変わっていった。この考察を通して、芥川と同じ時代を生きながら、既成文壇、新感覚派やプロレタリア文学という幾つかの潮流に直面した際に、文学青年が舵を取った方向性の一例を確認することができたと言える。

第四章では、大正末期から昭和初期における芥川の実態、及び当時において一定の勢力を持っていた商業雑誌『新潮』について考察した。まず、芥川晩年の「詩的精神」という志向の対極に、通俗小説の流行という時代背景があったことを指摘した。そこから、晩年における芥川の変貌が、彼の反通俗的な志向に因っていたことを論じた。これを芥川自身の文学観に投影すると、すなわち「物語」めいた作風を排し、「詩」の世界に憧憬の眼差しを向ける芥川の姿勢が浮かび上がるのである。芥川の変化については、次世代の作家や評論家達よりも、『新潮』のほうが、より著しい反応を示した。ただし、私小説のナビゲーターという傾向を持つこの雑誌は、少なくとも新潮合評会において、芥川に対して私小説風の作品を求めていた。しかし、同じ雑誌において、佐藤春夫と室生犀星は芥川が「詩的精神」を提起したのとほぼ同時に、それを受容する態度を示した。そして、合評会に比して、より高く芥川を評価したのも両者であった。芥川、佐藤、室生の共通点は新しいものを求める姿勢と言える。彼等が求めたのは物語でも、私小説でもなく、詩美であったのである。このように、同じ『新潮』に掲載された言説であっても、芥川に対する理解は多岐にわたるということが確認できた。

これまでの章と合わせて考えると、同じ晩年の芥川に対しても、大正末期の文壇においては、これだけ複雑で多様な視点が用意されていたのである。そして、逆から見れば、芥川もまた、このような多様な視点から評価されるに堪え得るほど、十分に広い幅を持った作家であったことが分かる。このような芥川を、一つのパラメータとして時代の中心に置いた際に、芥川自身と様々な立場にいる作家たちそれぞれの変化していく速度を相対的に測定することが可能となった。そして、周辺の文学者達が示した、晩年の芥川を受容する態度の相違を確認することで、それぞれの作家たちが遂げる変化のスピードには、違いが存在していたことが示唆されたのである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　李慧珏　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　准教授	斎藤　理生
	副 査　大阪大学　教授	清水　康次
	副 査　大阪大学　教授	加藤　洋介

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　大正末期から昭和初期の雑誌における芥川龍之介受容の諸相と新時代の文学の形成
―『文芸時代』、『文芸戦線』、『辻馬車』を中心として―

学位申請者　　李慧珏

論文審査担当者
主査　大阪大学准教授　斎藤理生
副査　大阪大学教授　清水康次
副査　大阪大学教授　加藤洋介

【論文内容の要旨】

本論文は、晩年の芥川龍之介の文壇における語られ方を多角的に考察した研究である。芥川の死に大正文学の終わりと昭和文学の始まりを見るのは、平野謙『昭和文学史』以来、文学史上の定説であった。それに対して本論文は、大正末期から昭和初期の複数の有力な同人雑誌における芥川関連言説の丹念な調査を通じて、一人の作家の死に時代の断絶を見る解釈に鋭く疑問を投げかけている。

第一章では、新感覚派の拠点となった『文芸時代』における芥川評が調査・分析されている。芥川について語られた言説が隈無く取りあげられ、時期や内容によって整理されていることはもちろん、芥川の名前が取り沙汰された同時代的な議論の潮流や、雑誌の性格の変化も考慮されている。そこで明らかにされるのは、『文芸時代』に集った若い同人たちが「新感覚派」という呼称を自分たちのものにしてゆく過程で積極的に芥川に論及していった軌跡である。また、単純に芥川を批判して自分たちをより優れたものとするのではなく、商業的な価値を求めて芥川に執筆してもらうことがあったことも押さえている。

第二章では、プロレタリア文学の牙城であった『文芸戦線』における芥川評が調査・分析されている。『文芸戦線』の論客たちが、既に文壇で名を成していた芥川を当初は強く批判し、やがて無視し、没後は部分的な理解を示すことで、自分たちの運動の方針や立場を構築していった過程が明らかにされている。

第三章では、より若い世代による芥川受容として、旧制大阪高校の文学青年たちが中心になって作った『辻馬車』における芥川評が分析されている。藤澤桓夫をはじめとする多彩な同人たちが、当初は主に新感覚派、やがてプロレタリア文学を受容してゆくのと並行して、各々異なる形で芥川を意識し、影響を受け、また差異化しようとしていった足跡が検証されている。

第四章では、谷崎潤一郎との「小説の筋」論争を糸口に、晩年の芥川が「詩的精神」を重視していたことが取りあげられて、『新潮』の「新潮合評会」の私小説的観点に拠った評価と佐藤春夫・室生犀星の詩美を重視した評価とを対比させながら、同世代の文学者たちの芥川観と、それが芥川自身の主張とどのように一致し、また齟齬していたのかが分析されている。

終章では、芥川晩年の言説空間を多角的に考察することを通じて、大正末期から昭和初期の文壇全体の関心と

方向性がわかること、とりわけ個々人に留まらない「文壇」全体の変化の速度が、芥川を指標とすることで鮮明に浮き彫りになることが明らかにされている。

【論文審査の結果の要旨】

本論は、晩年の芥川龍之介が同時代の文壇においてどのように語られ、時には利用されたのかを、複数の同人雑誌を綿密に調査することを通じて、実証的に明らかにした点が画期的である。また、一人の作家に留まらず、目まぐるしく変化する1920年代半ばの文壇状況を浮かび上がらせたことも貴重である。

特に第一章と第二章で、『文芸時代』と『文芸戦線』という、それぞれ新感覚派とプロレタリア文学という性質を大きく異にする集団の拠点となる雑誌における芥川に対する態度を分析することで、対照的だと見なされてきた両陣営が、既成作家へのスタンスにおいて共通しているという、両派の近似性を具体的に示した意義は大きい。

また、第三章で『辻馬車』という、これまでほとんど注目されてこなかった雑誌を取り上げることで、新進作家たちよりもさらに若い文学青年たちから見た視座を設け、また『新潮』の合評会や佐藤春夫らの言説を中心に同世代の文学者たちの芥川観もうかがうことで、晩年の芥川を取り巻いていた状況を重層的に描き出したことは大きな成果である。

一方で、課題も残されている。芥川の死に大正と昭和との断絶を見る定説への批判には説得力があるが、新たな文学史的な観点を提示するまでには至っていない。また、第四章で『新潮』に注目するのであれば、大正文壇の土台の形成に寄与したこの雑誌と、第一〜三章で扱ってきた三つの同人雑誌とが対立的な構図を作り出していることをより強調するべきであったろう。さらに、「受容」をはじめ、いくつかの鍵となる用語の使い方に、曖昧さや誤解を招く表現が見られなかったわけではない。

とはいえ、以上のような問題点は含みつつも、有力な定説に新たな光を投げかけた着眼と説得力、および複数の同人雑誌を丹念に読み解いた調査能力は高く評価されるべきである。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。